



SFB/3 Deluxe



SFB/3 初期モデル

SFB/3

SFBは Sand Field Baffle 3way system の略で砂をサンドイッチしたフロントバッフルと左右のステイのみで構成された後面開放型の同社フラッグシップモデル。右の初期モデルは50年代に開発されている。また左の SFB/3 Deluxe と名付けられた豪華な家具調モデルも当時は存在していた。ユニットは30cmの W12 woofer、25cmの W10 midrange unit、7cmのsuper3 tweeter からなる3Wayシステムで、全て紙タイプの振動板を持つユニットが搭載されている。ネットワークは採用されてなくwooferとmidrangeは全帯域駆動、tweeterのみ4μのコンデンサーで低域がカットされている。後面開放型システムを採用しているため、箱による音の濁りや影響がなく、このバッフルの前後と上方向に広がる音場空間表現からはこの会社の実力の高さがうかがえる。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第15回 Wharfedale

Wharfedaleは1932年、ギルバート・A・ブリックスによってイギリスのヨークシャー州で設立され、英国ではGoodmans社と共に最も古いスピーカーメーカーとして欧米では有名。また、彼は音響学者として1948年にスピーカーの設計理論書を書き上げていたり、スタインウェイ使用の名ピアニストであったことも知られている。1950年にはロンドンのフェスティバルホールでブリックスは、試聴者の目の前でオーケストラと自社スピーカーの聴き比べを行い、とても高い評価を得ている。日本では20cm、30cm口径のフルレンジユニットが良く知られているが、古い年代のシステムはほとんど紹介されていない。

SFB/3 60年代

写真のモデルは60年代になってからデザインされた珍しい家具調タイプ。ユニットの種類とネットワーク構成は初期型と同じとなっている。サラネットが布製に変更になった以外はバッフルの大きさ、フロントのバッフルの厚みや上向きに取り付けられたtweeterの位置、W12とW10の取り付け位置もほとんど初期型と変わっていない。市場価格は95～120万円。サイズは89W×31D×78Hcm

本文・田中伊佐資

製品解説／岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影／小林幹彦(彩虹舎)



Wharfedale



super 3 tweeter

7cm口径の紙の振動板に小さな握りこぶしほどのマグネットを持つトゥイーターで、ダンパーを持たないフェルトのエッジのみで振動板が固定されている。とても滑らかで高解像力のユニットであるが、ダンパーを持たないため、安定動作のために上向き方向での設置が必要となる



W12 woofer

紙の振動板を持つ30cm口径のユニットで布タイプのエッジが採用されている。低音音は豊かで厚みがあるが、高音音もボイスコイルが他のウーファーと比べるとかなり小さいため、上の帯域まで特性が伸びてフルレンジユニットに近い特性を持っている



SFB/3 Deluxeの背面部。super 3 tweeterが上向きに設置されているのが特徴的である



W10 midrange

このサイズのユニットとしては極めて小さいボイスコイル口径と紙の振動板にフェルトタイプのエッジを持つ25cm口径のユニットで、その再生音はこのシステムから繰り出される音のかんりの部分を支配していると思えるほどの表現力がある

いつものようにカメラマンが先行して撮影を始めている「アトリエJe-tee」への入り込むと、静電型らしきスピーカーが置いてあった。「おっクオードですね」とモノ知り顔で発言しようとしたら、店主の岡田さんが「珍しいでしょう。ワフデールなんです」と先に切り出してきてハジをかかずにすんだ。金属パネルのモデルを見てそう勘違いしたのだが、わきには撮影を終えたユニットがあり、確かにほかは箱の形になっている。

「日本では英国のスピーカーといえばタンノイというイメージですけど、ヨーロッパではワフデールとグッドマンが業界を引っ張ってきたんです。デザインが異なる3種類のSFB(左ページの解説参照)が揃うことはもうありえないでしょう」と岡田さんは説明してくれた。

もともとデラックスな、その名もズバリ「DELUXE」というモデルをつぶさに眺めてみると、ウーファーが30cm、スクーアーが25cmと非常に似た口径であることが僕には考えにくい。考えにくいじゃすまないのが、両ユニットとも帯域をネットワークでカットしていない「鳴り放題」状態であること。低域がかぶりあつたりしないのか。

まさに「ミッドレンジ大賞だ」

上も前に、豊かな音場を得ようとしていたということだ。 ナット・キング・コールの歌声から始めると、情念がこもった濃密なミッドレンジにのけぞった「うっ」と本当に声を漏らしてしまった。これはもうまさにミッドレンジ大賞だ。この音はいまのスピーカーでは出ない。ウーファーとスクーアーは帯域的にはもちろん広く重なっているけれど、エンクロージャーの後面を開放して、混濁させないようなチューニングをしているのだろうか。もしネットワークできれいに分割したら、つまらない音になるにちがいない。

優れた技術を持つているワフデールだが、最後の最後は技術者のトータルな感覚で完成させたように思った。 ちなみにアンプはこれも珍しいロンドン R.C.A. 英国コンビと僕が聴きたいののはビートルズ。その思い入れを差し引いても、ジョン・レノンの声に、厚みや張り出しだけじゃなくウェットな陰影感が出ている。ビートルズ・オーディオにはこれがとても重要。

声によければもちろんアト・ベッパのサククスもい。最後にかかったロッシーニの弦楽曲も低い重心を維持して弦がスピーカーの背後にブワッと広がった。ここでようやく、後ろだけでなく上空にも音を、ということでもトゥイーターを仰向けにした意味がわかったのだ。